パーソナルコンピュータに対する態度の日中比較

○落合 純¹・石渡 陽子²・彭 志春¹・尹 貴英¹ (非会員)・和田裕一¹

(¹ 東北大学大学院情報科学研究科・² 東北大学大学院国際文化研究科)

キーワード: コンピュータへの態度・中国・国際比較

A cross-cultural comparison in attitudes toward computers: China and Japan.

Jun OCHIAI¹, Yoko ISHIWATARI², Zhichun PENG¹, Guiying YIN¹ and Yuichi WADA¹

(¹ Graduate School of Information Sciences, Tohoku Univ., ² Graduate School of International Cultural Studies, Tohoku Univ.)

Key words: attitude toward computers, China, cross-cultural comparison.

目 的

パーソナルコンピュータ (以下, PC) が世界各国に普及する中, 異なる国の人々が PC に対してどのような態度や不安感を持っているのかを比較する研究はこれまで多く行われてきた (Rosen&Weil, 1995)。しかし, そのほとんどは欧米中心のものであり, アジア圏の国同士での比較研究などはあまりなされていない。

近年, 世界における中国の存在感は急速に増してきており, その成長には PC を含む情報技術の発達に関わっていると考えられる。では, このような状況下にある中国の PC に対する態度や不安感はどうなっているのだろうか。

本研究では, 中国語版 PC 態度尺度を作成し, 日本との比較を行った。

方 法

調査対象者: 日本国内のデータとして, 宮城県と福島県内の大学生 362 名 (男性 280 名, 女性 82 名) を対象に質問紙調査を行った。平均年齢は 19.36 歳であった。

中国のデータとして, 中国湖南省の大学生 205 名 (男性 72 名, 女性 127 名, 不明 4 名) を対象に質問紙調査を行った。平均年齢は 19.51 歳であった。

調査材料: 調査では, 落合・和田 (2009) で独自に作成した尺度を一部修正したものを使用した。使用した尺度を以下に示す。

(1) PC 態度尺度: この尺度は, “PC に対する肯定感”, “PC に対するネガティブ信念”, “PC から受ける心身的不快感”, “PC に対するポジティブ信念” の 4 因子から構成されており, ある程度の信頼性が確認されている。

(2) PC 操作スキル尺度: この尺度は, 得点が高ければ高いほど, PC 操作におけるスキルや知識が高いことを示している。

(3) PC セルフエフィカシー尺度: この尺度は, 得点が高ければ高いほど, PC 操作における自信が高いことを示している。

中国語版尺度の作成: 中国で調査を実施するために, 上記の質問紙を, 日本語がよく理解できている中国人留学生 2 名に翻訳してもらい, その中国語版の尺度を使用した。

調査手続き: 上記の尺度をまとめた質問紙の冊子を配布し, 任意に回答してもらった。制限時間は特に設けなかった。

結 果

日中の態度比較: 日中の PC への態度得点の違いを検討するために, 各下位尺度得点の合計値について t 検定を行った。その結果, ネガティブ信念 ($t(565)=4.88, p<.001$), ポジティブ信念 ($t(565)=4.11, p<.001$), PC 操作スキル ($t(565)=2.57, p<.05$) については, 中国よりも日本の方が有意に高い得点を示した。PC から受ける心身的不快感 ($t(565)=3.54, p<.001$) および PC セルフエフィカシーについては, 日本よりも中国の方が有意に高い得点を示すことが確

認された。PC に対する肯定感は, 日本と中国の得点差は有意ではなかった ($t(565)=-10.90, p<.001$)。

因子構造の検討: 次に, PC への態度の因子構造を日中で比較した。いずれも因子分析 (最尤法, Promax 回転) を行い, さらに, 項目のうち, 因子負荷量が .40 未満の項目および複数の因子にまたがって高い因子負荷量を示した項目を除外して再度因子分析を行った。

その結果, 日本語版では, PC 態度尺度は「PC に対する肯定感」($\alpha=.85$), 「PC へのネガティブ信念」($\alpha=.78$), 「PC から受ける心身的不快感」($\alpha=.79$), 「PC へのポジティブ信念」($\alpha=.66$) の 4 因子が, PC 操作スキル尺度 ($\alpha=.89$) および PC セルフエフィカシー尺度 ($\alpha=.82$) はいずれも 1 因子が抽出された。

一方, 中国語版では, PC 操作スキル尺度については 1 因子 ($\alpha=.85$), PC 態度尺度に関しては「PC に対するポジティブな評価」($\alpha=.80$), 「PC から受ける心身的不快感」($\alpha=.73$), 「PC に対するネガティブ信念」($\alpha=.60$) の 3 因子が, PC セルフエフィカシー尺度については「困難さの知覚」($\alpha=.78$) と「自信の有無」($\alpha=.77$) の 2 因子が抽出された。

考 察

本調査では, 日本と中国の PC に対する態度の違いを検証した。得点の比較では, 日本は中国に比べ, PC 操作スキルが高く, ネガティブ信念およびポジティブ信念が高い一方, 心身的不快感は中国の方が高いことが明らかになった。この結果は, 日本で PC 使用が広く普及しているためと思われる。PC のスキルや知識が高く, 利用時におけるストレスも少ないのはこのためであろう。ネガティブ信念やポジティブ信念が高いのは, PC 使用の普及に伴い, その便利さや PC による犯罪などの利点・欠点が多くユーザーに認知されるようになっていからだと考えられる。ただし, 中国の方が PC セルフエフィカシーが高いという結果については, 明らかでない。

しかしながら, 中国における PC への態度の因子構造は, 異なるものであった。日本語版では, PC 態度尺度は 4 因子に, PC セルフエフィカシー尺度は 1 因子にまとまったが, 中国語版では, PC 態度尺度は 3 因子に, PC セルフエフィカシー尺度は 2 因子にまとまった。このような結果を考えると, 得点の比較結果の妥当性については疑問が残る。今回の調査では, バックトランスレーションは行っておらず, このような手続き上の問題が影響を与えたのかもしれない。今後の調査においては, そうした問題点を改善する必要がある。

引用文献

- 落合 純・和田裕一 (2009) 東北心理学会第 63 回大会発表
論文集 (印刷中)
Rosen, L.D., & Weil, M.M. (1995) *Computer in human behavior*,
11,45-64.